

派遣者番号	27J02	氏名	海上 尚美
研究主題 —副主題—	「博物館の教育支援機能の活用がもたらす高校教員の新たな力量」		
派遣先	東京学芸大学大学院	担当教官	君塚 仁彦
所属校	東京都立浅草高等学校	校長	寺島 雅夫

キーワード 博学連携 教育支援 教員の力量形成 教員研修 チーミング

## 1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

博物館の活用が高等学校段階の子供にとってなぜ必要であるかという疑問を基に、高等学校での博物館を活用した授業実践を「教育支援」という視点から改めて見直す。

松田恵示による「教育支援」の定義に依拠して、博物館の提供するプログラムやサービスを「教育支援」と捉えることによって、従来の「博学連携」や「教育普及」の枠を超えて、博物館と学校との関係を一層深め、双方の内部に変化を起こし、より高い次元でのパートナーシップをもたらすことが可能だと考えた。

その実現には、子供と博物館の媒介役として、展示をはじめとする博物館のもっている教育支援機能を引き出す、その活動に必要な資源を学校内で調整して確保するなど、教員個人に自身の外にある人や機関をつなぐ力、つながりを見付ける力が新たに必要になってくるのである。

本研究では、今後の教育で求められる教員の新たな力量形成について、博物館の教育支援機能に着目し、その活用方法についての提案とそれが子供にもたらす教育効果について論じていく。

## 2 研究の内容・研究の方法

### 【調査】

高校での博物館活用の実態を明らかにするために以下の調査を行った。

- ① 高等学校日本史A・日本史B・世界史A・世界史での博物館活用に関する記述の比較・分析
- ② 都立高校等教員への博物館活用に関するアンケート調査

また、博物館活用の実践事例と博物館の提供する教育支援プログラムの開発の経緯や優れた点を明らかにするために以下の調査を行った。

① 博物館の教育支援プログラム関係者への聞き取り調査

② 博物館活用を行っている教員への聞き取り調査

### 【事例検討】

上記調査の結果を踏まえつつ、博物館を活用した実践事例の分析と併せ、博物館の活用が、子供が資料を通じた対話や作品製作などによりコミュニケーションの難しさと大切さを学び取るなど、その成長に寄与したことを論証する。

実践事例では、学習指導要領で定められた教科のほか、学校設定科目や長期休業中の講習という自由度の高い枠の中での実践も取り上げた。

また、学校の実情に即した連携の形として、他の高等学校(中学校)での授業実践についても論じる。

さらに、私立学校のほか都立の昼夜間定時制高校や夜間定時制高校での実践事例の分析とそれを行った教員への聞き取り調査を行った。

博物館活用に関心をもった教員が、学校の特色や実情を考慮しながらどのような授業を行ったかを見ていくことによって、関心の背景、実践の成果と課題を明らかにし、教員自身の力量形成や視野の変容について探る。

博物館活用の実践を広げていくためには、これから博物館の教育支援機能を活用する教員が、いかにその力量形成を行うかが課題となる。

授業をはじめとする高校での教育活動の中での博物館活用は、たまたま関心をもった教員が単発的に行うものではなく、子供の力を伸ばしていくために教員が学校の教育課程に基づいて行われるべきものである。

そのための力量をどのように身に付けるかを考えたとき、教員研修の場に一定の有効性があることを論じる。各自治体や私学協会などが行う研修もあるが、未経験の教員が実践に踏み出す効果に

乏しいようである。

ここでは都立高校を中心とした地理歴史科教員の研究団体である東京都歴史教育研究会の教科指導法研修会を事例として、プログラムの特徴と参加教員の感想から、博物館を会場にしたワークショップ型の研修と、他の教員や博物館職員との意見交換が実践への挑戦と博物館の教育支援機能の活用に有効であることを述べる。

ここでは、平成29年度までに7回を数えた研修会の参加者アンケートに寄せられた教員及び博物館職員の声を中心として、その効果の測定を図る。

教員が博物館の教育支援機能活用の力量を身に付ける場として、複数校での合同実践が有効であると考え、その実践について取り上げる。

初めて博物館活用に取り組もうとする、特に経験年数の浅い教員が、実際に自身で活用する機会をもってみることは非常に重要である。やってみてそれが生徒に与える効果も実感できることから、今後の実践継続につながりやすい。ここでは、公立美術館で行った夏休みの合同講習を事例として分析し、その効果を検証する。

### 3 研究の結果

博物館活用については、指導内容としての取り上げ方は教科や教科書によって大きな差異があることが分かった。しかし実際は、これらの記述にはほとんど注意は払われない。博物館活用についての都立高等学校教員へのアンケート調査を通じて、博物館活用の実践が行われていない要因についての考察が深まった。しかし、回答の背景については推測に頼る部分もあり、明確に指摘することは難しい。ひとつ言えるのは、学校と博物館の物理的な距離の遠さはそれほど大きな問題ではなく、心理的な距離の遠さがより深刻な問題であることである。

博物館関係者への聞き取り調査からは、優れた教育支援プログラムの開発過程及び、活用に当たった博物館側の留意点を明らかにできた。それを踏まえて、博物館活用を実践している都立高等学校教員への聞き取り調査からは、それぞれの学校に応じた活用方法があり、その取組が生徒理解を深め、さらにそれが教員自身の授業改善の契機となり、その連関が教員としての新たな力量向上につながっていったことが分かった。

## 4 研究の考察

博物館活用の事例が小中学校に比べて乏しかった高等学校の在り方について論じたことで、改めて高等学校段階で博物館活用を行うことの価値付けを行うことができた。

また、教員に新たな力量が求められる中で「教員の専門性」について捉え直し、地理歴史科教員の意識変革の必要性についても指摘した。新学習指導要領で設置が予想される「歴史総合」「歴史探究」に当たっては、博物館での学びが一層意味をもつことを再確認した。

教員の新たな力量形成の必要性と同時に、博物館での利用のしやすさの課題解決も必要である。ここでは、一教員の工夫では解決できず、かつ一部の高校生にとっては博物館に行くことをためらわせる問題として、高校生の入館料について論じた。すぐに状況が変わるとは考えにくい、活用をしながら粘り強く訴えていかなければならないことを確信した。

そして、私が最近注目している「ネガティブ・ケイパビリティ（消極的能力）」と「チーミング（帯域）」という概念が、教員の新たな力量に関連性が深いことを論じた。

## 5 今後の展望

多様な調査を行ったが、個々の調査から引き出した知見が乏しかった反省がある。高等学校教員の力量形成という独自性はあるが、地理歴史科教員を中心とする議論に終始してしまった。今後、美術工芸教育研究会との合同研修会での教科ごとの差異などを手掛かりにして、高等学校教員全体について少しずつでも力量の内容を具体化していきたい。

また、取り上げた博物館の教育支援プログラムが一般化しにくいものであった。これは、資源に恵まれた館の提示したモデルケースとして捉えることも可能であろう。しかし、「チーム学校」のメンバーとして地域社会との連携を望むなら、地域博物館については、今後の研究の対象としたい。

教員の実践事例についても、それぞれの学校の実情に応じた取組とはいえ、バランスの悪いものになってしまった。「自分でもやれそうだ」と今後増えるであろう教員集団を支援するには、さらに違った特徴をもつ学校の事例を検討の対象にしなければならない。聞き取り調査はしたものの論文に盛り込めなかった学校の事例について、別途発表の機会を得たい。

